

YK さんのお母様の手記

赤ちゃんを授かった時、とても嬉しく、上が男の子だったので、次は女の子だといいなあ、とっていました。健康な赤ちゃんが生まれてくると、当然の様に信じていました。6ヶ月の(23週)検診の時に、「先生性別を教えてください。」とお願いしたのですが、先生は何も言わずに時間をかけてエコーでみて下さいました。その時先生は、性別どころではなかったのです。県立こども病院へ、その時のビデオと紹介状を持って行くように言われました。ショックでした。まさか、自分の赤ちゃんに何かあるなんて・・・

「どこがおかしいのですか?」「何か異常が見つかったのですか?」「この子生きられますか?」質問したのですが、先生は「こども病院の専門の先生に診ていただいて。」とだけ、おっしゃって何も教えてはもらえませんでした。

こども病院を受診する日まで、考えられるだけの最悪な事を考えていました。いい事なんて何も考えられませんでした。救いは夫が私のように落ち込まず、「どんな病気や障害があっても、頑張って育てていこう。」と言ってくれたことでした。両親や、親戚も皆励ましてくれました。周りは、皆暖かく、優しくてありがたかったのですが、不安でいっぱいでした。

こども病院の予約日、暗い気持ちで外来の椅子に座っていました。先生の診察の前に、看護師さんに呼ばれ体重や血圧を測って、そして「今どういうふうに聞いて、ここに来ましたか?今どういう気持ちですか?」と聞かれた時、私は声を上げてわんわん泣いてしまいました。

始めて逢った人の前でこんなに泣いた事は、後にも先にもありません。

すごい勢いで泣き続ける私に、看護師さんは、「我慢しないで泣きたいだけ泣いていいよ。」と言ってくれたのです。そこで、思い切り泣いたせいか、その後の産科の海野先生、循環器科の里見先生の診察の時も、里見先生から赤ちゃんの心臓の説明を聞いている時も、もう涙は出ませんでした。

赤ちゃんは、先天性の心疾患でした。病名は、右胸心、単心室、両大血管右室起始、共通房室弁。心臓以外にも、どこか異常があるかもしれないと思うとますます辛く産まれるまでいつも心のなかに、不安がありました。知らされなければ、よかったと思う事もありました。

妊娠中毒症があり予定より早めの入院でした。病室でも、泣いていました。泣いても、どうしようもないと解っていたのですが、泣けて泣けてしかたなかったのです。産科病棟で、同じ様に出生前診断で赤ちゃんの病気が解った妊婦さんと、慰めあい、励ましあい、話しました。その時だけは気持ちが楽になったのです。

無事産まれてからも、NICUに面会に行く度に涙が溢れてしかたがありませんでした。優花と名づけました。1度目の手術を終えて、ICUでたくさんのチューブに繋がれている姿を見て、また、泣いていました。優花が1番頑張っているのに、いつまでもめめそめそしてしまうダメな母親でした。

2度目の入院時に、やっと回りに目を向ける事が出来たのでしょうか?病院に付き添う他のお母さん達と話をすると、皆それぞれ違う病気や障害を抱え、最初は泣き続け、落ち込み、そんな時期を過ぎて、今明るく前向きに、子供に寄り添っているのだという事が解りました。

それにより、自分も変わったのだと思います。

最初は、お腹にいる時に知らされてとても辛く、産んだ後で解った方がよかったかも、とっていました。出産後自宅で急に状態が悪くなりそれから、検査を受けていたなら、優花は今の様に元気に生きていなかったかもしれない・・・と思っています。お腹にいる時から、この子はこの時期にこういう状態になり、この時期に手術が必要と先生方が、準備して下さった事は、病気をもち生まれてくる優花にとって、最善の環境を整えて戴けたのです。

病気の赤ちゃんを産むという、育てていくという、その事を自分自身受け入れる事に、時間がかかったかもしれませんが、でも、生まれてから解ったとしたら、もっと時間がかかったと思っています。今では、最初に診断して下さいた上田原マタニティクリニックの宮下先生、出生前から、今も診て下さっている県立こども病院の里見先生、原田先生、他の先生方やスタッフの皆様から心から感謝しております。